論文

韓国の多文化家族における外国人妻の日常生活に関連した苛々感と精神的健康の関係

尹　靖水[1)]・朴　志先[2)]・鄭　英祚[3)]
金　貞淑[4)]・中嶋和夫[5)]

要約：本研究は，韓国の多文化家族の外国人妻を対象に，日常生活に関連した「苛々感」（Irritated feeling）と精神的健康の関連性を明らかにすることを目的とした。調査対象は，韓国 C 道に在住する多文化家族の外国人妻 2,000 人とした。日常生活に関連したストレス認知を独立変数，GHQ-12 で測定された精神的健康を従属変数，また 5 種類の変数（「夫と妻の年齢差」「学歴差」「結婚形態」「夫の収入」「妻の韓国語習得状況」）を統制変数とした因果関係モデルのデータへの適合性は，構造方程式モデリングで解析した。結果は，多文化家族の外国人妻の苛々感は精神的健康に密接に関係しており，特に，「家族・近隣の人々に対する否定的感情」と「経済的逼迫感」が強く精神的健康に関係していた。以上のことから，多文化家族の妻が日常生活の中で直面しているストレス問題を，社会福祉学的な観点から生活問題と捉え直し，積極的に介入することの必要性が示唆された。

キーワード：外国人妻，生活ストレス，精神的健康，構造方程式モデリング

目次

1. 緒言
2. 研究方法
3. 研究結果
　3–1. 対象者の属性
　3–2. 各測定尺度の妥当性と信頼性および得点分布
　3–3. 妻の日常生活に関連した苛々感と精神的健康の関係
4. 考察

1. 緒　言

最近の東アジア 3 地域（日本，韓国，台湾）の国際結婚に共通した特徴（石井加世子，2004；Kafman, E., 1999；Ko-Li Chin, 1994）は，近隣の東南アジア地域との経済格

1）梅花女子大学現代人間学部，同志社大学社会学部嘱託講師
2）両備介護研究所
3）岡山県立大学大学院保健福祉学研究科博士後期課程
4）慶尚南道女性能力開発センター
5）岡山県立大学保健福祉学部，同志社大学社会学部嘱託講師
*2012 年 7 月 25 日受付，2012 年 7 月 25 日掲載決定

差（Push-Pull 理論）（Alicea, M., 1997）に起因する人口移動が顕著なこと，加えて，中華人民共和国，モンゴル，フィリッピン，タイ，カンボジア，ベトナム，グルジア等の地域から多くの女性を「ニュー・カマー」として迎え入れていることである。それらニュー・カマーの増加は，前記の経済格差のみならず，「婚姻適齢人口の性比不均衡による婚姻市場への圧迫」（キムトゥソプ，2006）が関係している。それは一方では，農村地域の嫁不足の補完として，また他方では都市部の未婚男性の急増ならびに障害者や高齢者に対する介護人の必要性を理由としている。しかし，それらニュー・カマーの多文化家族を取り巻く生活環境は，「多文化共生」（国籍や民族などの異なる人々が，互いの文化的ちがいを認めあい，対等な関係を築こうとしながら，共に生きていくこと）の視座から見直すと，極めて劣悪で過酷な状況となっている（Lievens, J., 1999；Truong T-d., 1996；Hong-zen Wang and Shu-ming Chang, 2002）。韓国政府は，そのような状況を勘案して「在韓外国人処遇基本法」を 2007 年に制定した。その基本方針は，「外国人の人権保障」（教育や医療サービス等基本的人権保障の充実など），「国家競争力の強化」（専門人力は積極誘致，単純技能人力は制限的導入／言語等の文化同質性を有する外国籍同胞の優先配慮），「多文化包容と社会統合」（多様性に対する相互理解／結婚移民者とその子どもに対する社会適応の支援）を重視し，国益と多文化家族を構成する家族員の人権保障の均衡をはかろうとしている。それは，視点を変えるなら，国際結婚移民女性に着目した制度や政策に関連した市民運動ならびに研究業績の成果とも言えよう（Górny, A. and Kpiska, E., 2004；Tan, J. and Davidson, G., 1994；松本祐子，2004）。加えて，韓国政府は 2008 年に「多文化家族支援法」を制定し，同年 9 月から施行している。この「多文化家族支援法」には，多文化家族が安定した生活を送り，生活の質を向上させられるよう，国や地方自治体が積極的に支援しなければならないという責務が述べられ，具体的には，保健福祉家族省による 3 年毎の実態調査，差別や偏見の防止と多様性を認める土壌づくり，多文化家族への情報提供や教育支援を推進していくことの必要性が盛り込まれている。なお，多文化家族の家族形成に関連した従来の研究では，夫婦葛藤（Menjívar, C. and Salcido, O., 2002）等の日常的なストレス問題，国際結婚に関連した結婚満足感（Rianon, N. J. and Shelton, A. J., 2003；Raj, A. and Silverman, J., 2003；Kim, Jae-Yop. and Emery, C., 2003；Kasturirangan, A., Krishnan, S. and Riger, S., 2004），精神的健康（Lee, E., 2007）等のストレス反応といった側面が検討されている。ただし，東アジア 3 地域の社会福祉学領域においては，ニュー・カマーとしての国際結婚移民女性が家族形成を具体的に継続する中で，どのような生活問題（福祉ニーズ）に直面し，またその生活問題が貧困，離婚，DV，ウエルビーイング等といった種々の次元のアウトカムにどのように関係するのか，さらには国際結婚移民女性やその家族に対するネガティブなインパクトを予防するにはどのようなソーシャルワーク援助技術が有

効に機能するといえるのか，といった観点からの研究はほとんど蓄積されていない。国際結婚移民女性を対象としたストレス研究を積極的に展開することは，その研究が単なる社会福祉学領域の重要な学術研究の課題であるいうことに留まらず，多文化家族のウエルビーイングの維持・向上にとっても，また個々人の人権を尊重した社会福祉の実践活動の展開にとっても有益な知見が得られるものと期待できる。

本研究は，多文化家族の外国人の妻を対象に，多文化家族に対する社会福祉学的な介入指針をえることをねらいとして，日常生活に関連した苛々感（Irritated feeling）が精神的健康にどのような影響を与えているかを明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

本研究では，韓国 C 道に在住する多文化家族の妻を対象とした。韓国 C 道女性政策開発院の研究員が，調査地域としてランダムに C 道内 9 地域（4 市 5 郡）を選定し，さらに調査対象として多文化地域センターを利用している多文化家族の妻をランダムに 2,000 人抽出した。前記女性政策開発院の依頼を受けた多文化センターの責任者が調査員となり，調査票の配布と回収を担当した。調査員は，調査実施に際して調査対象に調査で得られた内容やプライバシーの保護に留意することを約束し，納得できた対象者のみに回答を依頼した。

調査内容は，属性，日常生活に関連した苛々感（ストレス認知），精神的健康（ストレス反応）で構成した。属性は，妻の年齢，国籍，学歴，結婚に至った経過（結婚形態），家族構成，韓国語能力，ならびに夫の年齢，学歴，収入とした。それら質問には調査対象となった妻がすべて回答した。前記調査内容のうち，夫の収入は月収で無収入から 500 万ウォン以上までの 7 段階で把握した。結婚に至った関係は，商業的な仲介業者の紹介による結婚か否か等について回答を求めた。妻の韓国語能力は理解能力，会話能力，読む能力，書字能力の 4 側面について，たとえば理解能力の場合は「1. まったく分からない」「2. 少しは分かる」「3. だいたい分かる」「4. よく分かる」の 4 件法で回答を求めた。また，前記の日常生活に関連した苛々感は，これまでの著者らの相談経験等を基礎に 6 因子各 4 項目計 24 項目（夫に対する否定的感情，家族・近隣に対する否定的感情，韓国文化に対する否定的感情，社会生活活動に関する制限感，経済的な逼迫感情，コミュニケーションに関する制限感）で構成した。妻の苛々感の回答と得点は，「0 点：全くそう感じない」，「1 点：少しそう感じる」，「2 点：かなりそう感じる」，「3 点：とてもそう感じる」とした。精神的な健康状態は GHQ-12（Goldberg, DP. and Hiller, VF., 1979）で測定した。GHQ-12 で測定された精神的健康状態は「1–1–0–0」方式で得点化した。その総合得点は得点が高いほど不健康であることを意味し，一般的に

3 点以上が精神的に不健康な状況に置かれていることを意味している。以上の調査に際しては，中国語版，タガログ語版，タイ語版，ベトナム語版，日本語版を基本として準備し，他の国々に属する場合は英語版を使用した。翻訳は，翻訳の専門家に依頼し，各国数名のネイティブに予備調査を行いながら最終版を作成した。

統計解析では，多文化家族の妻の日常生活に関連した苛々感（ストレス認知）と精神的健康（ストレス反応）の因果関係を，単回帰ならびに重回帰モデルのふたつを準備した。具体的には，独立変数を妻に対する否定的感情などの 6 因子とする場合とそれら 6 因子で構成される二次因子モデルとする場合の因果関係モデルを仮定し，またいずれの因果関係も従属変数は GHQ-12 で測定された内容を 1 因子モデルとした。このとき，苛々感と精神的健康の関係性をより厳密に吟味するねらいから，統制変数として「夫と妻の年齢差」,「学歴差」,「結婚形態」,「夫の収入」,「妻の韓国語習得状況（以下,「妻のコミュニケーション能力」)」，の 5 変数を採用した。「妻のコミュニケーション能力」に関しては 4 項目 1 因子モデルを仮定した。結婚形態は，商業的な仲介業者の紹介による結婚に対しては「1」，その他の結婚には「0」のダミー変数とした。

上記のふたつの因果関係モデルのデータへの適合性の検討には構造方程式モデリングを採用し，相関係数は多分相関係数，重み付けは最小二乗法を採用した。測定尺度の因子モデルならびに因果関係モデルのデータへの適合度の評価には，Root Mean Square Error Approximation（RMSEA）と Comparative Fit Index（CFI）を採用した。なお，本研究で用いた測定尺度の信頼性は「日常生活に関連した苛々感」と「妻のコミュニケーション能力」はクロンバックの α 信頼性係数，GHQ-12 は KR-20 信頼性係数で求めた。以上の統計解析には，所蔵の「SPSS 12.0 J for Windows」と「Mplus 2.14」を使用した。

統計解析には，回収された 1,250 人（回収率 62.5％）のデータのうち，統計解析に必要なデータに欠損値を有さない 719 人のデータを投入した。

3. 研究結果

3–1. 対象者の属性（表 1）

集計対象 719 人の属性の分布は表 1 に示した。妻の年齢は平均 30.0 歳（標準偏差 7.4，範囲 18～58 歳），夫の年齢は平均 42.6 歳（標準偏差 5.9，範囲 27～63 歳）であった。夫と妻の年齢差は平均 12.6 歳（標準偏差 7.0，範囲－5～40 歳）であった。結婚に至った経過は，上位 3 位までに着目するなら,「商業的な仲介業者の紹介による結婚」が 313 人（43.5％),「韓国で国際結婚している友人の紹介による結婚」が 118 人（16.4％),「宗教団体の紹介による結婚」が 108 人（15.0％）の順であった。夫の月収は,「100 万－200 万ウォン未満」が 381 人（53.0％）で最も多く,「100 万ウォン未満」が 177 人

表 1　対象者の属性分布（n＝719）

単位：人（%），n＝719

年齢	妻	平均年齢	30.0 歳	標準偏差	7.4
				範囲	18〜58
	夫	平均年齢	42.6 歳	標準偏差	5.9
				範囲	27〜63
	平均		12.6 歳	標準偏差	7.0
				範囲	−5〜40
結婚に至った経路	商業的な仲介業者の紹介による結婚			313	(43.5)
	宗教団体の紹介による結婚			108	(15.0)
	韓国で働いている家族・親戚の紹介による結婚			103	(14.3)
	韓国で国際結婚している友人の紹介による結婚			118	(16.4)
	外国人労働者として韓国に滞在し日常生活での恋愛で結婚			27	(3.8)
	その他			50	(7.0)
夫の月収	100 万ウォン未満			177	(24.6)
	100–200 万ウォン未満			381	(53.0)
	200–300 万ウォン未満			91	(12.7)
	300–400 万ウォン未満			18	(2.5)
	400–500 万ウォン未満			11	(1.5)
	500 万ウォン以上			4	(0.6)
	収入なし			37	(5.1)
妻の国籍	中華人民共和国			164	(22.8)
	ベトナム国			267	(37.1)
	日本国			56	(7.8)
	フィリピン			141	(19.6)
	タイ国			23	(3.2)
	モンゴル			19	(2.6)
	カンボジア			31	(4.3)
	インドネシア			2	(0.3)
	カザフスタン			3	(0.4)
	その他			13	(1.8)
最終学歴（夫）	未就学			11	(1.5)
	小学校卒業			64	(8.9)
	中学校卒業			122	(17.0)
	高等学校卒業			376	(52.3)
	専門学校相当の学校の卒業			52	(7.2)
	大学（4 年制）卒業			76	(10.6)
	大学院卒業			18	(2.5)
最終学歴（妻）	未就学			13	(1.8)
	小学校卒業			76	(10.6)
	中学校卒業			221	(30.7)
	高等学校卒業			222	(30.9)
	専門学校相当の学校の卒業			111	(15.4)
	大学（4 年制）卒業			64	(8.9)
	大学院卒業			12	(1.7)
家族構成	夫婦だけ			86	(12.0)
	夫婦と子ども			249	(34.6)
	夫婦と子どもと夫婦の兄弟姉妹			16	(2.2)
	夫婦と子どもと義父母（義父母のいずれでも可）			150	(20.9)
	夫婦と子どもと自分の親（父母のいずれでも可）			134	(18.6)
	夫婦と子どもと自分の親と夫婦の兄弟姉妹			18	(2.5)
	その他			66	(9.2)

（24.6%），「200 万－300 万ウォン未満」が 91 人（12.7%），「収入なし」が 37 人（5.1%），「300–400 万ウォン未満」が 18 人（2.5%），「400–500 万ウォン未満」が 11 人（1.5%），「500 万ウォン以上」が 4 人（0.6%）の順であった。妻の国籍は，上位 3 位に着目するなら，「ベトナム」が 267 人（37.1%），「中華人民共和国」が 164 人（22.8%），「フィリピン」が 141 人（19.6%）の順であった。夫と妻の最終学歴は，第一位に着目するなら，夫は「高校卒業」が 376 人（52.3%）と最も多く，妻は「高校卒業」が 222 人（30.9%）であった。家族構成は，上位 3 位までに着目するなら，「夫婦と子ども」が 249 人（34.6%）と最も多く，「夫婦と子どもと義父母（義父母のいずれでも可）」が 150 人（20.9%），「夫婦と子どもと自分の親（父母のいずれでも可）」が 134 人（18.6%）の順となっていた。

3–2. 各測定尺度の妥当性と信頼性および得点分布

3–2–(a) 外国人妻の日常生活に関連した苛々感測定尺度

外国人妻の日常生活に関連した苛々感の質問に対する回答分布は表 2 に示した。外国人妻の日常生活に関連した苛々感測定尺度の因子構造モデル（一次因子を「夫に対する否定的感情」，「家族・近隣の人々に対する否定的感情」，「韓国文化に対する否定的感情」，「社会生活活動に関する制限感」，「経済的な逼迫感情」，「コミュニケーションに関する制限感」で構成し，「日常生活に関連する苛々感」を二次因子とする二次因子モデル）のデータへの適合性は，CFI が 0.937，RMSEA が 0.081 となっており，統計学的な許容水準を満たしていた。また，クロンバックの α 信頼性係数は 24 項目で 0.908 であった。多文化家族の妻の苛々感の平均は 20.4 点，標準偏差 13.9，範囲は 0～67 点であった。

3–2–(b)．精神的健康（GHQ-12）

精神的健康（GHQ-12）における回答分布は表 3 に示した。GHQ-12 因子構造モデル（12 項目で構成される一因子モデル）のデータへの適合性は，CFI が 0.916，RMSEA が 0.105 であり，パス係数に異常値は観察されなかった。KR-20 信頼性係数は 0.821 であった。GHQ-12 の得点分布は，平均が 3.7 点（標準偏差 3.0）で，3 点以上を精神的に不健康とするなら，該当者は 426 人（59.2%）であった。

3–2–(c)．外国人妻のコミュニケーション能力測定尺度

外国人妻のコミュニケーション能力の質問に対する回答分布は表 4 に示した。妻のコミュニケーション能力は，「回答 4」に着目するなら，理解能力は 182 人（25.3%），会話能力は 171 人（23.8%），読む能力は 160 人（22.3%），書字能力は 143 人（19.9%）であった。なお，これら 4 項目を 1 因子とする因子モデルのデータへの適合性は，CFI が 1.000，RMSEA が 0.066 で（読む能力と書字能力間の誤差相関を認めた），統計学的

表 2　日常生活に関連した苛々感に関する回答分布

単位：人（%），n＝719

質問項目	回答カテゴリ			
	全くそう感じない	少しそう感じる	かなりそう感じる	とてもそう感じる
【夫に対する否定的感情】				
X 1 夫の言動（ふるまい）が理解できず不愉快になる	255(35.5)	255(35.5)	125(17.4)	84(11.7)
X 2 夫は親身に悩みを聞いてくれないので悲しい	290(40.3)	248(34.5)	115(16.0)	66（9.2）
X 3 夫は気分のムラが激しくて気持ちが落ち着かない	412(57.3)	182(25.3)	85(11.8)	40（5.6）
X 4 夫は私の要求をほとんど拒否するので腹が立つ	338(47.0)	240(33.4)	90(12.5)	51（7.1）
【家族・近隣に対する否定的感情】				
X 5 舅・姑が優しくないので悲しい	429(59.7)	174(24.2)	71（9.9）	45（6.3）
X 6 舅・姑に自分の気持ちが伝わらないので悲しい	330(45.9)	234(32.5)	87(12.1)	68（9.5）
X 7 舅・姑と意見が合わず悩まされる	368(51.2)	200(27.8)	96(13.4)	55（7.6）
X 8 家族からお金のため結婚したと疑いを受けるので，気分が悪い	457(63.6)	139(19.3)	60（8.3）	63（8.8）
【韓国文化に対する否定的感情】				
X 9 韓国の冠婚葬祭は難しく煩わしい	253(35.2)	284(39.5)	112(15.6)	70（9.7）
X 10 韓国社会は男尊女卑の傾向が強いので不愉快になる	254(35.3)	267(37.1)	113(15.7)	85(11.8)
X 11 韓国社会の礼儀作法は複雑なので頭が混乱する	238(33.1)	292(40.6)	110(15.3)	79(11.0)
X 12 韓国社会はコシアン（ダブル）に対する差別や偏見があるので不愉快になる	302(42.0)	272(37.8)	89(12.4)	56（7.8）
【社会生活活動に関する制限感】				
X 13 緊急の助けが必要なときに相談できる人がいないので悲しくなる	336(46.7)	224(31.2)	74(10.3)	85(11.8)
X 14 近隣の人が自分や自分の国を馬鹿にしているので腹が立つ	397(55.2)	205(28.5)	66（9.2）	51（7.1）
X 15 交通手段，町中の標識や信号等の意味が分からず外出に不安を感じる	396(55.1)	207(28.8)	79(11.0)	37（5.1）
X 16 社会保障（医療保障など）の利用が難しくて不安になる	348(48.4)	248(34.5)	79(11.0)	44（6.1）
【経済的逼迫感】				
X 17 家族（自分の親や兄弟）に仕送りができず心苦しい	262(36.4)	234(32.5)	117(16.3)	106(14.7)
X 18 夫の収入が不安定なので将来の生活に不安を感じる	244(33.9)	265(36.9)	104(14.5)	106(14.7)
X 19 生活必需品がほとんど買えないので悲しい	314(43.7)	239(33.2)	97(13.5)	69（9.6）
X 20 借金やローンがいつ返済できるか心配になる	409(56.9)	172(23.9)	76(10.6)	62（8.6）
【コミュニケーションに関する制限感】				
X 21 言葉習得の時間や機会が少ないので，楽しくない	312(43.4)	210(29.2)	100(13.9)	97(13.5)
X 22 近隣の人から言葉が下手なことで嘲笑され，悲しい	381(53.0)	215(29.9)	76(10.6)	47(6.5)
X 23 韓国語だけの会話の意味が理解できないので，生活が楽しくない	239(33.2)	263(36.6)	113(15.7)	104(14.5)
X 24 ハングルで書かれた文章の意味はほとんど理解できないので，字を見ただけで，とても頭の中が混乱する	414(57.6)	207(28.8)	62（8.6）	36（5.0）

表 3　精神的健康に関する回答分布

GHQ–12

単位：人（%），n＝719

質問項目	回答カテゴリ＊			
	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4
Y 1 何かをする時にいつもより集中して	335(46.6)	272(37.8)	93(12.9)	19(2.6)
Y 2 心配事があって、よく眠れないことは	95(13.2)	226(31.4)	300(41.7)	98(13.6)
Y 3 いつもより自分のしていることに生きがいを感じることが	356(49.5)	257(35.7)	92(12.8)	14(1.9)
Y 4 いつもより容易に物ごとを決めることが	271(37.7)	311(43.3)	115(16.0)	22(3.1)
Y 5 いつもストレスを感じたことが	116(16.1)	264(36.7)	254(35.3)	85(11.8)
Y 6 問題を解決できなくて困ったことが	113(15.7)	259(36.0)	283(39.4)	64(8.9)
Y 7 いつもより問題があった時に積極的に解決しようとすることが	365(50.8)	268(37.3)	73(10.2)	13(1.8)
Y 8 いつもより気が重くて、憂うつになることは	101(14.0)	246(34.2)	310(43.1)	62(8.6)
Y 9 自信を失ったことは	146(20.3)	258(35.9)	262(36.4)	53(7.4)
Y 10 自分は役に立たない人間だと考えたことは	258(35.9)	263(36.6)	143(19.9)	55(7.6)
Y 11 一般的にみて、幸せといつもより感じたことは	331(46.0)	268(37.3)	103(14.3)	17(2.4)
Y 12 ノイローゼ気味で何もすることができないと考えたことは	336(46.7)	248(34.5)	112(15.6)	23(3.2)

＊項目 1：「回答 1：できた」，「回答 2：いつもと変わらなかった」，「回答 3：いつもよりできなかった」，「回答 4：まったくできなかった」
項目 2, 3, 6, 9, 10, 12：「回答 1：まったくなかった」，「回答 2：あまりなかった」，「回答 3：あった」，「回答 4：まったくできなかった」
項目 4, 7：「回答 1：できた」，「回答 2：いつも変らなかった」，「回答 3：できなかった」，「回答 4：まったくできなかった」
項目 5：「回答 1：あった」，「回答 2：いつもと変わらなかった」，「回答 3：なかった」，「回答 4：まったくなかった」
項目 8：「回答 1：まったくなかった」，「回答 2：いつもと変わらなかった」，「回答 3：あった」，「回答 4：たびたびあった」
項目 11：「回答 1：たびたびあった」，「回答 2：あった」，「回答 3：なかった」，「回答 4：まったくなかった」

表 4　外国人妻のコミュニケーション能力に関する回答分布

単位：人（%），n＝719

質問項目	回答カテゴリ＊			
	回答 1	回答 2	回答 3	回答 4
Xa 1 話の内容が良く分かりますか	10（1.4）	88（12.2）	439（61.1）	182（25.3）
Xa 2 気楽に話せますか	27（3.8）	83（11.5）	438（60.9）	171（23.8）
Xa 3 新聞や雑誌が読めますか	37（5.1）	125（17.4）	397（55.2）	160（22.3）
Xa 4 文章が気楽に書けますか	65（9.0）	105（14.6）	406（56.5）	143（19.9）

＊理解能力：「回答 1：全く分からない」「回答 2：少しは分かる」「回答 3：だいたい分かる」「回答 4：よく分かる」
　会話能力：「回答 1：気楽に話せない」「回答 2：少しは気楽に話せる」「回答 3：だいたい気楽に話せる」「回答 4：気楽に話せる」
　読む能力：「回答 1：全くよめない」「回答 2：少しは読める」「回答 3：だいたい読める」「回答 4：よく読める」
　書字能力：「回答 1：気楽に書けない」「回答 2：少しは気楽に書ける」「回答 3：だいたい気楽に書ける」「回答 4：気楽に書ける」

に有意な水準を満たしていた。クロンバックの α 信頼性係数は 4 項目で 0.883 であった。妻のコミュニケーション能力測定尺度で求めたコミュニケーション能力の平均は 8.0 点，標準偏差 2.6，範囲は 0〜12 点となっていた。

3–3．外国人妻の日常生活に関連した苛々感と精神的健康の関係

3–3–(a)．単回帰因果関係モデルのデータへの適合性と変数間の関係

外国人妻の日常生活に関連した苛々感を 6 因子 24 項目で構成した二次因子モデルを独立変数，GHQ-12 の 1 因子モデルを従属変数とする単回帰因果関係モデルは，データに適合した（図 1）。妻の日常生活に関連した苛々感から GHQ-12 に向かうパス係数は

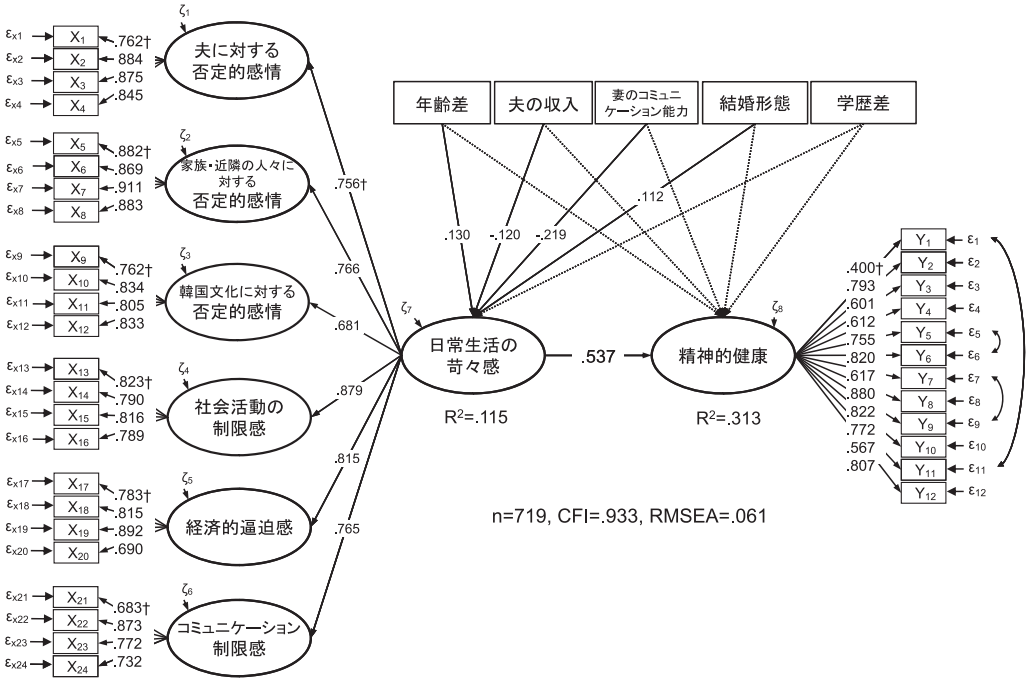

図 1　夫の日常生活に関連した苛々感と精神的健康の関係（標準化解）

0.537（寄与率 31.3%）で，統計学的に有意な水準にあった。このことは妻が日常生活に関連した苛々感を強く感じているほど，精神的健康が損なわれていることを示唆している。なお，統制変数として投入した夫と妻の年齢差，結婚形態，夫の収入，妻のコミュニケーション能力は妻の苛々感に有意な関係を示していた。換言するなら，夫と妻の年齢差が高いほど，商業的な仲介業者の紹介による結婚をしている妻ほど，夫の収入が低いほど，また妻のコミュニケーション能力が低いほど，日常生活に関連する苛々感が強かった。しかし，夫と妻の学歴差は苛々感に統計学的に有意な関係になかった。また，精神的健康に対していずれの統制変数も統計学的に有意な関係になかった。

3–3–(b)．重回帰因果関係モデルのデータへの適合性と変数間の関係

外国人妻の日常生活に関連した苛々感の下位概念である 6 因子を独立変数，GHQ-12 の 1 因子モデルを従属変数とする重回帰因果関係モデルは，データに適合した（図 2）。家族・近隣の人々に対する否定的感情と経済的逼迫感から GHQ-12 に向かうパス係数

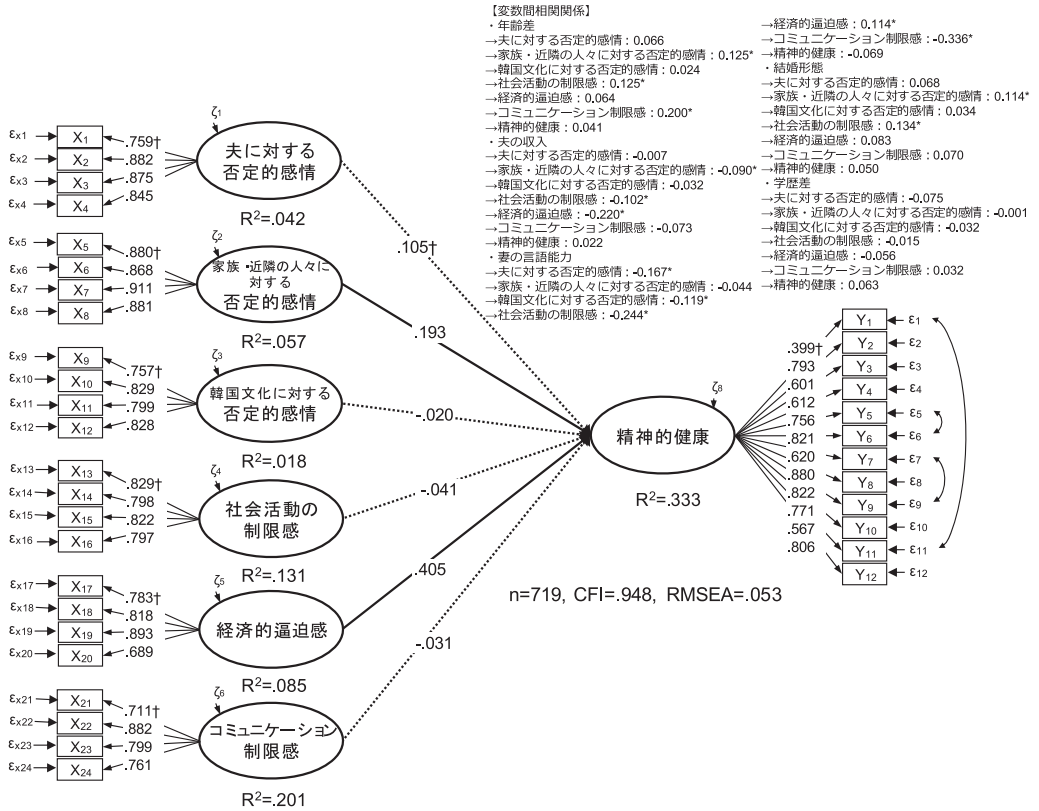

図 2　夫の日常生活に関連した苛々感の各領域と精神的健康の関係（標準化解）

注 1）図中の四角は観測変数，楕円は潜在変数を意味する。観測変数内の英数字は項目を区別するために便宜的に記載した。

注 2）図中の実線は統計学的に有意なパス，破線は統計学的に非有意なパスである（有意性検定ができない制約されたパスを除く）。なお，実線（破線）上の数値は標準化推定値，†はモデル識別のために制約を課したパスである。

注 3）図の煩雑化を避けるため，誤差変数および誤差変数間の相関係数の数値は省略している。

はそれぞれ 0.193，0.405 で，統計学的に有意な水準にあった。しかし，夫に対する否定的感情（0.105）と韓国文化に対する否定的感情（－0.020），社会生活活動に関する制限感（－0.041），コミュニケーションに関する制限感（－0.031）から GHQ-12 に向かうパス係数は統計学的に有意な水準を示さなかった。また，夫と妻の年齢差は家族・近隣の人々に対する否定的感情，社会活動の制限感，コミュニケーション制限感に有意な関係を示しており，夫と妻の年齢差が高いほど，家族・近隣の人々に対する否定的感情，社会活動の制限感，コミュニケーション制限感を強く認知している傾向にあった。夫の収入は家族・近隣の人々に対する否定的感情，社会活動の制限感，経済的逼迫感に有意な関係を示しており，夫の収入が低いほど，家族・近隣の人々に対する否定的感情，社会活動の制限感，経済的逼迫感を強く認知している傾向を示した。妻の言語能力は夫に対する否定的感情，韓国文化に対する否定的感情，社会活動の制限感，経済的逼迫感，コミュニケーション制限感に有意な関係を示しており，妻の言語能力が低いほど，夫に対する否定的感情，韓国文化に対する否定的感情，社会活動の制限感，経済的逼迫感，コミュニケーション制限感を強く認知している傾向にあった。結婚形態は家族・近隣の人々に対する否定的感情，社会活動の制限感に有意な関係を示しており，商業的な仲介業者を通して結婚している妻ほど，家族・近隣の人々に対する否定的感情，社会活動の制限感を強く認知している傾向にあった。なお，夫と妻の学歴差はいずれの変数に対しても統計学的に有意な関係になかった。

4. 考　察

最近の東アジア 3 地域の国際結婚移民女性に関連した社会問題は，一般的に，1）売買婚的な結婚，2）身分上の不安，3）家庭内暴力，4）貧困，5）外国人に対する排除と偏見，6）コミュニケーション，7）子どもの教育などに類型化されている。また，多文化家族の家族形成に関連した従来の研究では，夫婦葛藤（Menjívar, C. and Salcido, O., 2002），結婚満足感（Rianon, NJ and Shelton, AJ, 2003；Raj, A. and Silverman, J., 2003；Kim, JY. and Emery, C., 2003；Kasturirangan, A., Krishnan, S. and Riger, S., 2004），精神的健康（Lee, E., 2007）等が検討されている。しかし，国際結婚移民の妻が日常的生活に関連しているどのようなストレスに曝露され，またそれが精神的健康にどのように影響しているかを検討した研究はほとんど見あたらない。本研究では，韓国多文化家族を対象とする社会福祉学的な介入に必要な基礎資料をえることをねらいとして，妻の日常生活に関連した苛々感と精神的健康との関連性を明らかにすることを目的に行った。その際，日常的に遭遇する多文化家族の妻のストレス曝露状況をよりリアリティーに表現することに主眼を置いて，可能な限り多文化家族の夫が遭遇しているストレス問題をよ

り総合的に反映させながら，それらの概念的ならびに数量的な加算性（一次元性）を確認しつつ，そのストレス反応へのインパクトの程度を明らかにすることを志向した。具体的には，多文化家族の妻が日常的に経験しているストレス問題を 6 領域に区分し，かつそれら領域に関連した調査項目を，適切な統計学的方法を駆使することで，因子構造モデルを構築し，それら因子と GHQ-12 で測定された精神的健康との関連性について潜在変数を用いて整理した。潜在変数を用いることの利点は，要素間の関連性の希薄化を誤差を取り除くことで克服し，より正確な関係の程度が把握できることにある。

その結果，まず第一に，韓国の多文化家族の妻の精神的な健康状態を示す GHQ-12 の総合得点は，平均が 3.7 点（標準偏差 3.0）で，3 点以上を精神的に不健康とするなら，該当者は 426 人（59.2％）に達していることを明らかにした。一般的に，思春期から青年期にかけての精神的な不健康状態，たとえば抑うつ症状を呈する者は成人より高く（Kandel, DB. and Davies, M, 1982 ; Kaplan, SL., Hong, GK. and Weinhold, C., 1984；川上憲人ら，1987 ; Craig, TJ. and Van Natta, PA., 1979 ; Hirschfeld, RMA. and Cross, CK., 1982），年齢とともに低下し，高齢者ではまた高くなることが指摘されている（Zung, WWK., 1967）。またさらに，思春期の女性で抑うつ症状を呈している者の割合が高い（高倉実ら，1996 ; Schoenbach, VJ. et al., 1982 ; Garrison, CZ. et al., 1989）とも報告されている。本研究の結果から，多文化家族の妻の精神的な健康状態は，通常の人々に比して決して良好な状況にあるわけではないことが示唆された（Abraham, M., 1999）。従って，精神的健康状態に日常的なストレス問題がどのように関係しているかを明らかにすることが，最終的には社会福祉的なアプローチを体系化していく上で重要な情報をもたらすものと判断されることから，本研究ではそれら変数間の関連性を検討した。

統計解析の結果は，前記因果関係モデルはデータに適合し，多文化家族の妻の日常的な生活の中での苛々感は精神的健康に密接に関係している（寄与率 31.3％）ことを示していた。また本研究で取り上げた妻の苛々感を構成している 6 領域（夫に対する否定的感情，家族・近隣に対する否定的感情，韓国文化に対する否定的感情，社会生活活動に関する制限感，経済的な逼迫感情，コミュニケーションに関する制限感）のうち，特に，「家族・近隣の人々に対する否定的感情」と「経済的逼迫感」が強く精神的な健康と関係していた。従来の精神的健康に影響すると想定されている性別や年齢等の要因（増地あゆみら，2001；藤野善久ら，2006；三浦理恵ら，2009）に比して，多文化家族の妻の生活に関連したストレス問題は，彼らの精神的な健康状態に対して大きな影響力を持っていると言えよう。なおこの結果は，視点をかえるなら，ラザルスのストレス認知理論（Lazarus, RS. and Folkman, S., 1987）が，前記仮説の実証的な検討を通して，検証されたことを意味している。ストレス認知理論を援用したストレス認知とストレス反

応の関連性（因果関係）を想定する仮説を導出し，その実証的な検討を志向した著者らの一連の研究は，職場問題（岡田節子ら，2001；佐藤ゆかりら，2003），育児問題（中嶋和夫ら，1999；岡田節子ら，2004）や介護問題（Sadanori Higashino et al, 2003；Sadanori Higashino et al, 2005），高齢者の機能低下問題（森本美智子ら，2002；森本美智子ら，2005；矢嶋裕樹ら，2004；Yuki Yajima et al, 2004）等と関連したものであったが，本研究の結果は，理論の検証という観点からは，それらと同様の知見と位置づけられる。換言するなら，多文化家族の妻のストレス問題はストレス認知理論に従うことで，今後さらに一層解明が進むものと推察され，その成果は社会福祉学的な介入にとって大きな貢献をもたらすものと期待できよう。他方，「家族・近隣の人々に対する否定的感情」と「経済的逼迫感」が特に精神的健康と密接に関連していたことは，社会福祉学的アプローチの必要性を示唆する意義深い情報と言えよう。たとえば，多文化家族の妻の経済的な逼迫感情は夫の収入とも関係していたことを考慮するなら，多文化家族の貧困問題にどのように介入すべきか，それは従来からの社会福祉学的な重要課題であって，その解決に向けての介入は精神的な不健康の快復，ひいてはウェルビーイングの改善に繋がるものと言えよう。他方，ネガティブなストレス認知は，たとえば介護者にあっては高齢者虐待（柳漢守ら，2007；桐野匡史ら，2005），母親にあっては児童虐待（唐軼斐ら，2005；2007）と密接に関連することが知られている。従って，その知見を援用するなら多文化家族の妻の生活に関連したストレス問題の解決は，社会福祉学的な個別介入における重要な課題なることを専門家は強く認識すべきものと言えよう。

以上，本研究においては，韓国の多文化家族の妻を対象に生活に関連したネガティブなストレス認知を苛々感で把握し，その精神的健康への影響について検討することで，ストレス認知理論を支持する結果を得た。また特に，「家族・近隣の人々に対する否定的感情」と「経済的逼迫感」が精神的健康に影響していたことは，多文化家族の妻に対する地域福祉計画や個別介入プログラムの開発にとっても意義深い知見と言えよう。ただし，多文化家族の妻の生活に関連したストレス問題に対する個別介入に際しては，いまだ介入のための知識や技術が十分に確立しているとは言い難いことから，その解決に向けての研究が喫緊の課題と言えよう。

参考文献

Abraham, M.（1999）「Sexual Abuse in South Asian Immigrant Marriages」『Violence Against Women』5(6)：591–618.

Alicea, M.（1997）「“A Chambered Nautilus”：The Contradictory Nature of Puerto Rican Women’s Role in the Social Construction of a Transnational Community」『Gender and Society』597–626.

Craig, TJ. and Van Natta, PA.（1979）「Influence of demografic characteristics on two measures of depressive symptoms：The relaton of prevarence and persistence of symptoms with sex, age, education, and marital status」『Archives of General Psychiatry』35：149–154.

藤野善久，堀江正知，寶珠山務，筒井隆夫，田中弥生（2006）「労働時間と精神的負担との関連についての体系的文献レビュー」『産業衛生』48：87–97.

Garrison, CZ., Schluchter, MD., Schoenbach, VJ. and Kaplan, BK.（1989）「Epidemiology of depressive symptoms in young adlescents」『Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry』28：343–351.

Goldberg, DP. and Hiller, VF.（1979）「A scaled version of the General Health Questionnaire」『Psychological Medicine』9：139–145.

Górny, A. and Kpiska, E.（2004）「Mixed marriages in migration from the Ukraine to Poland」『Journal of Ethnic and Migration Studies』30（2）：353–372.

Hirschfeld, RMA. and Cross, CK.（1982）「Emidemiology of affective disorders」『Archives of General Psychiatry』39：35–46.

Hong-zen Wang and Shu-ming Chang（2002）「The Commodification of International Marriages：Cross-border Marriage Business in Taiwan and Viet Nam」『International Migration』93–116.

石井加世子（2004）「再生産労働力としての国境を越えた人の移動－既存研究のまとめ－」『NUCB Journal of Economics and Information Science』49（2）：397–409.

Kafman, E.（1999）「Female‘Birds of Passage’a Decade Later：Gender and Immigration in the European Union」『International Migration Review』33（2）：269–299.

Kandel, DB. and Davies, M.（1982）「Epidemiology of depressive mood in adolescrnts」『Archives of General Psychiatry』39：1205–1211.

Kaplan, SL., Hong, GK. and Weinhold, C.（1984）「Epidemiology of depressive symptomatology in adolescents」『Journal of the American Academy of Child Psychiatry』23：91–98.

Kasturirangan, A., Krishnan, S. and Riger, S.（2004）「The Impact of Culture and Minority Status on Women’s Experience of Domestic Violence」『Trauma, Violence, & Abuse』5（4）：318–332.

川上憲人，原谷隆史，金子哲也，小泉明（1987）「企業従業員における健康習慣と抑うつ症状の関連性」『産業医学』29：55–63.

キムトゥソプ（2006）「韓国人における国際結婚の説明枠と婚姻および離婚申告資料の分析」『韓国人口学』29（1）：25–56.

Kim, Jae-Yop. and Emery, C.（2003）「Marital Power, Conflict, Norm Consensus, and Marital Violence in Nationally Representative Sample of Korea Couples」『Journal of Interpersonal Violence』18（2）：197–219.

桐野匡史，矢嶋裕樹，柳漢守，筒井孝子，中嶋和夫（2005）「要介護高齢者の介護者の負担感と心理的虐待の関係」『厚生の指標』52（3）：1–8.

Ko-Li Chin（1994）「Out-of-town brides：international marriage and wife abuse among Chinese immigrants」『Journal of Comparative Family Studies』25：53–70.

Lazarus, RS. and Folkman, S.（1987）「Transactional theory and research on emotions and coping」『European Journal of Personality』1：141–169.

Lee, E.（2007）「Domestic Violence and Risk Factors among Korean Immigrant Women in the United States」『Journal of Family Violence』22：141–149.

Lievens, J.（1999）「Family-forming migration from turkey and Morocco to Belgium：The demand for marriage partners from the countries of origin」『International Migration Review』33（3）：717–744.

松本祐子（2004）「国際結婚とドメスティック・バイオレンス－アジア系外国人女性の事例を中心に－」『聖徳大学研究紀要人文学部』15：55–62.

増地あゆみ，岸玲子（2001）「高齢者の抑うつとその関連要因についての文献的考察」『公衆衛生誌』48：435–448.

Menjívar, C. and Salcido, O.（2002）「Immigrant Women and Domestic Violence：Common Experiences in Different Countries」『Gender & Society』16（6）：898–920.

三浦理恵，青木邦男（2009）「大学生の精神的健康に関連する要因の文献的研究」『山口県立大学学術情報』2：175–183.

森本美智子，中嶋和夫，高井研一（2002）「慢性閉塞性肺疾患患者の機能障害ならびにストレス認知と精神

的健康との関係」『日本看護研究学会雑誌』25(4)：17–31.

森本美智子，高井研一，中嶋和夫（2005）「病気や生活に関する不安認知が精神的健康に及ぼす影響」『日本看護研究学会雑誌』28(2)：51–58.

中嶋和夫，齋藤友介，岡田節子（1999）「母親の育児負担感に関する尺度化」『厚生の指標』46(3)：11–18.

岡田節子，齋藤友介，中嶋和夫（2001）「保育士の職場ストレッサー認知の構造化」『保育学研究』39(2)：73–79.

岡田節子，荒川裕子，種子田綾，中嶋和夫（2004）「育児負担感と精神的健康の関係」『静岡県立大学短期大学部研究紀要』17：115–126.

Raj, A. and Silverman, J.（2003）「Immigrant South Asian Women at Greater Risk for Injury From Intimate Partner Violence」『American Journal of Public Health』93(3)：435–437.

Rianon, NJ. and Shelton, AJ.（2003）「Perception of Spousal Abuse Expressed by Married Bangladeshi Immigrant Women in Houston, Texas, U.S.A.」『Journal of Immigrant Health』5(1)：37–44.

柳漢守，桐野匡史，金貞淑，尹靖水，筒井孝子，中嶋和夫（2007）「韓国都市部における認知症高齢者の主介護者における介護負担感と心理的虐待」『日本保健科学学会誌』10(1)：15–22.

Sadanori Higashino, Takako Tsutui, Masafumi Kirino, Yuki Yajima, Yong-Taek Ki and Kazuo Nakajima（2003）「Development of the Family Caregiver Burden Inventory（FCBI）」『International Journal of Welfare for the Aged』9：1–14.

Sadanori Higashino, Han-su Yu, Masafumi Kirino, Yuki Yajima, Sumiei Tsutui, Takako Tsutui, Kazuo Nakajima（2005）「The Relationship between Mental Health and Care Burden in the Primary Caregivers of Seniors requiring Support Care」『日本保健科学学会誌』8(3)：147–153.

佐藤ゆかり，渋谷久美，中嶋和夫，香川幸次郎（2003）「介護福祉士における離職意向と役割ストレスに関する検討」『日本社会福祉学』44(1)：67–78.

Schoenbach, VJ., Kaplan, BH., Grimson, RC. and Wagner, EH.（1982）「Use of a symptom scale to study the prevalence of a depressive syndrome in young adlescents」『American Journal of Epidemiology』116：791–800.

高倉実，平良一彦，新屋信雄，三輪一義（1996）「高校生の抑うつ症状の実態と人口統計学的変数との関係」『日本公衆衛生雑誌』43(8)：615–623.

Tan, J. and Davidson, G.（1994）「Filipina-Australian marriage：Further perspective on spousal violence」『Australian Journal of Social Issues』29(3)：265–282.

唐軼斐，矢嶋裕樹，桐野匡史，種子田綾，中嶋和夫（2005）「児に対するマルトリートメント傾向の測定」『日本保健科学学会誌』7(4)：269–276.

唐軼斐，矢嶋裕樹，中嶋和夫（2007）「ストレス認知理論を基礎とする児に対するマルトリートメントの発生メカズム」『厚生の指標』54（4)：13–20.

Truong, T-d.（1996）「Gender, international migration and social reproduction：implications for theory, policy, research and networking」『Asian Pac Migr J』5(1)：27–52.

矢嶋裕樹，間三千夫，中嶋和夫，河野淳（2004）「聴力低下ストレス認知と精神的健康度」『Audiology Japan』47(3)：149–156.

Yuki Yajima, Masafumi Kirino, Aya Taneda, Yong-Taek Kim, Kazuo Nakajima（2004）「The Influence on Depression of Perceived Stressful Environments in Institutional Settings」『International Journal of Welfare for the Aged』10：55–65.

Zung, WWK.（1967）「Depression in the normal aged」『Pschosomatics』8：287–292.

The Relationship between Irritated feeling related to Daily life and Mental health of Foreign wives in Multi-cultural family of Korea

Jungsoo Yoon, Ji Sun Park, Young Jo Cheong, Jung Suk Kim and Kazuo Nakajima

The purpose of the study was to clarify the relationship between Irritated feeling and the mental health of the multi-cultural family foreign wife of Korean. In this study, 2000 multi-cultural family foreign wife who live in C prefecture of Korea. The questionnaire consisted to attribute irritated feeling related to daily life and mental health. Put five variables (difference of the age between husband and wife, difference of the education between husband and wife, husband's income, marriage continuance, foreign wife's learning condition of Korean) as a control variables, and analyzed suitability of causation model's data which are irritated feelings related to foreign wife's daily life as independent variables, mental health condition measured with GHQ-12 as dependent variable with structure equation modeling. As a result, causation model which examined above-mentioned factor statistically fitted in with meaningful standard data. Specially, 'negative feelings towards family/neighbors' and 'economic pressure' was strongly related to mental health. From the above result, place stress related to daily life with living problem or living needs from a social welfare studies point of view for multi-cultural family wife's maintenance and promotion of mental health, and was suggested to take an active hand.

Key words : Foreign wife, Daily life stress, Mental health, Structural equation modeling